広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第65号　2016　129－137

文学的文章の読みにおける読者の自己内対話に関する研究

―『羅生門』における自己内対話の過程を手がかりに ―

武　田　裕　司

（2016年10月６日受理）

A Study on the Reader's Self-dialogue in Literary Reading
― A clue to the process of self-dialogue of Ryunosuke Akutagawa "Rashoumon" ―

Yuji Takeda

Abstract: In this paper, I consider the self-dialogue of the reader in the literary reading. First, I overviewed theory "The Dialogical self" by H. Hermans. It revealed a process of self-dialogue of the reader as a clue that. Second, using a Ryunosuke Akutagawa "Rashoumon", it was considered a model of self-dialogue of the reader. As a result, along with the reveal the process of reading of being based on multiple of the readers of self, it was able to reveal the value of as a teaching tool of Ryunosuke Akutagawa "Rashoumon". The literature there is a function to activate the self-dialogue, the reader is thereby obtain a new noticed.

Key words: Literature, self-dialogue, Ryunosuke Akutagawa, Rashoumon
キーワード：文学的文章，自己内対話，芥川龍之介，羅生門

1. 問題の所在

山元 (1994) は国語科の読むことの領域において「自立した読者」の育成が最終的な目標であるとし，「自立した読者として学習者を育てていくには，読むことについての意識を学習者の内に育てていく必要がある」と述べる。山元の言う「自立した読者」の育成を目指した読むことの学習指導では，読むという行為を通して自らを振り返ることや社会との相関の中で自らを捉えることを「ことば」によって行うことのできる学習者の育成が目指されることになる。「自立した読者」を育てていく上で，文学的文章のもつ価値については多くの言及がなされてきた (山元，2005等)。文学的文章を読むという行為は，現代の複雑化した社会を生きる読者が自分自身を振り返る，また自己内対話を行い，私という存在について追究する契機となりうるものである。

一方で，このような文学的文章を国語科の授業において用いることについては難波 (2008) が，学習者が教師の意図を汲み，そこから外れないように自己を表出させることや，教室において他の学習者らを気にして「本当の」自己を隠して，本意ではない自己を表出させることになりかねないという問題を指摘している。教室において文学的文章を読むという行為が，学習者自身にとって「私」という存在を追究するものとはなりえず，他者の期待に沿う読みにとどまってしまうという問題がここには述べられている。そこにはその場の他者の評価を得ることによってしか，自己承認を得ることができないという問題点が潜んでいるとされる (土井，2009，pp14-15)。また永田 (2009) も，国語教育と「自己」は深い関係性をもちながらも，国語教

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：山元隆春（主任指導教員），田中宏幸，難波博孝，間瀬茂夫

育研究における「自己」に対する議論が不十分であることを指摘している。これらのような問題に対して難波は，自己同士の関係性という観点から言及を行い，永田は国語科の先行研究における自己観を抽出した上で，国語教育における新たな自己観を提案した。共に精緻な調査・分析によって導き出された，優れた先行研究である。しかし，読者の自己内対話のあり様，またそれによって何が生みだされるのかという「過程」に関する言及については十分ではない。

そこで本稿においては読者の複数の自己間の対話の過程に焦点をあて，文学的文章の読みの学習において学習者の内に行われる自己内対話の持つ意義について明らかにすることを目的とする。方法として，はじめに国語教育学領域における読者の自己内対話に関する先行研究を整理する。

次に，文学的文章の指導における学習者の自己内対話について考察する際の有効な手がかりとして「対話的自己」論を検討する。

最後に『羅生門』（芥川龍之介）という文学的文章に対して学習者の内部に展開される自己内対話の過程を，ここでは稿者自身の読みの過程に基づいて内省的に検討し，自己内対話モデルを構想する。これらの検討を通して，読みにおける自己内対話過程を明らかにすることが，『羅生門』の学習にもたらす意義について考察する。読者の自己内対話の過程を明らかにすることは，「自立した読者」を育成するための重要な足場になると考えるからである。

2. 読者の自己内対話に関する先行研究

自己内対話という観点から文学的文章の持つ価値について考察した論考は多く見られる。丹藤 (2001) は文学的文章の「他者性」に目を向け，そのことが読者と文学的文章との対話を促すものであるとする一方で，文学的文章とどのように向き合えば「対話」関係を持つことができるのか，また読者のうちに自己内対話を引き起こすことになるのかについて教材の側から検討しようとしたものである。

山元 (2005a) も文学的文章の授業における「対話」を，「個としての読者の，教材との一対一」の〈対話〉である「内的〈対話〉」，「他者である教室の仲間の「読み手たち」との間に生ずる対話」である「外的〈対話〉」の二層として捉え，文学的文章はこれら「内的〈対話〉」「外的〈対話〉」を導く属性を持っているとし，これを文学的文章の〈対話喚起性〉と呼んでいる。このようにして喚起された自己内対話によって生み出されるものを，山元は以下のように述べている。

ぶつかりあい，というのは闘いという意味ではない。そうではなくて，異なるものが併置されることによって何ごとかが産み出されるありさまを言うのである。学習という営みは，おそらくそのようなぶつかりあいが個人内であるいは個人間でなされることによって進んでいくはずのものである。(山元，2005a，p624)

ここでは，文学的文章を読み，異なるもの同士が自己内において対話することによってこれまでにはなかった新たなものが生み出される場合があることが指摘されており，常に新たなものが生み出されるというわけではなく，そこに可能性があるという部分が重要である。このような自己内対話が活性化される条件に関して山元は主体の内部に〈複数性〉が存在することを指摘した上で，「自己内の不均衡なり，矛盾・葛藤なり，衝突なりということが「自我の成長」を招き，「新しい対象に対応する新しい自我」を生み出す」(山元，2007a，p296) と述べる。複数の自己同士が「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」といった関係であることが，自己内対話を喚起し新たな発見や自らに関して深く思索することにつながるとされている。このような「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」といったものが，自己内対話を喚起させる点に文学的文章に価値があることを，丹藤と山元は述べているのである。

また読者の自己内対話に関して府川 (1995) は，読者が語り手の語る世界と関わり，そして登場人物に同化し寄り添うこと，また登場人物と距離をとり異化することを通して行われるものであることを述べており，「自己内対話をおこなうということは，外部から導入された内なる他者たちと交流する行為であり，それゆえに新しい自己が導き出せるということになる」(府川，1995，p17) としている。上に取り上げた丹藤 (2001) や山元 (2005a)・府川 (1995) は，文学的文章の〈対話喚起性〉という観点から読者の自己内対話について言及している。

しかしこの〈対話喚起性〉は文学的文章の属性としてだけではなく，自己の内奥や他者の言葉のなかにも見出されるものであり，読者の自己や他者との関わりによる自己内対話に関してより検討する必要がある。また近年では濱田 (2013) が共同的学習によって学習者の内になされる自己内対話の過程について明らかにしようとしている。そこでは他者の言葉を取り込む際に，他者の言葉と自己の言葉との関係性によって，生徒が作品のことばに出会い直す姿が描き出されている。濱田は，教室内の他の学習者との対話によって自己内対話が活性化されるということを実際の学習者の書き言葉を基に明らかにしている。このように，読者の自己

内対話に関しては様々な先行研究が存在し，そこでは文学的文章が読者の自己内対話を活性化させる文学的文章の〈対話喚起性〉が示されており (丹藤 (2001), 山元 (2007a) など)，そのような文学的文章を教室で読むことによって，他の学習者の意見や感想が自己内対話を活性化させる契機となることが述べられていた (濵田 (2013)。

しかしながら，学習者内の複数の自己間における自己内対話の過程については具体的な姿が十分に示されているとは言い難い。つまり，複数の自己同士での「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」によって自己内対話が引き起こされる過程，「内なる他者との交流」の様相，またそれらが新たなものを生み出す過程について，自己内対話という行為を理論的に踏まえた上でのより詳細な検討が必要である。

このような文学的文章の読みにおける読者の自己内対話について，心理学領域における自己論を用いて説明したものとして山元 (2007b) が挙げられる。山元はハーマンスらの「対話的自己」論における「I ポジション」の考え方を用いて，文学的文章を読む際の読者の自己内対話モデルに言及している。そこでは「小説を読む際の読者の「自己」の身の置きどころ」として「I ポジション」が提示されている。I ポジションとは自己内における様々な私を「ポジション」として捉えたものである。山元はポール・フライシュマンの『種をまく人』を例として挙げながら，複数の語り手という I ポジションに身を置きながら小説を読むことによって自己内対話が活性化されることを述べている。しかし，この先行研究においては以下の二点についての検討の余地がある。一点目はハーマンスらの「対話的自己」論における重要な概念である「内部ポジション」「外部ポジション」についての言及がなされていないこと。二点目に，語り手以外の I ポジションについての言及が見られないことである。この二点に焦点をあてながら文学的文章を読む際の読者の自己内対話モデルについて検討する。読みの過程や自己内対話の過程についてより詳細な考察のため，以下にハーマンスらの「対話的自己」論を概観し，「内部ポジション・外部ポジション」という概念を捉えた上で，文学的文章を読む際の読者の自己内対話モデルについて検討する。

3.「対話的自己」論の検討

溝上 (2008) では，ポストモダン社会に見られるアイデンティティとして複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観が指摘され，アイデンティティ形成の場が「多」領域化し，「自己」をめぐる問題が複雑化していることが指摘されている。このような社会状況の中で提唱されたものが，心理学者ハーマンスらによる「対話的自己」論である。「対話的自己」論はハーマンスらによって1993年に刊行された The Dialogical Self のなかで展開された論であり，2006年に溝上らによって訳書『対話的自己―デカルト / ジェームズ / ミードを超えて』として出版され，溝上 (2008) 等で既に検討がなされている。この「対話的自己」論は，W. ジェームズや G.H. ミードらの自己論を基としながら，そこに M. バフチンの「多声性」の考え方を統合させた自己論である。「自己」を「複数の I ポジション」として捉え，またその I ポジションを移動しながら，他の I ポジションとの間で対話が行われると説明する。I ポジションとは図 1 (溝上，2008，p114) に黒丸 (●) で示されているような様々なポジションのことである。図1は「対話的自己における内部・外部ポジションと外界」をあらわしたものであり，自己内における様々な I ポジションのイメージを図示したものである。このようにハーマンスらは自己を分権化された複数の I ポジションであると捉えている。ハーマンスらによれば自己の世界は大きく二つの円世界 (内部ポジション / 外部ポジション) にわけられる。「内部ポジション」は「私」だと感じられる様々な「私」ポジションを示し，「外部ポジション」は「他者ポジション」「モノポジション」と呼ばれるものを示す。この「外部ポジション」と呼ばれるものは，自らの外部にある客観的な存在を示すものではなく，外界に存在しているものを自己世界の内に取り込んだものである。

このように自己の世界に存在する様々な立ち位置を明るみにだすことができる点にこの論の特徴が見られる。さらに，図1中で Self とされるメタ的な視点をとる第三のポジションが存在すると仮定されているが，

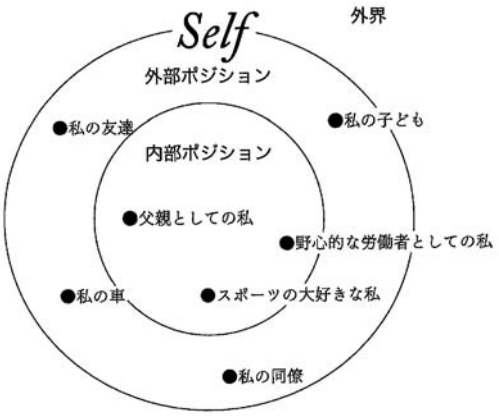

図1：対話的自己における内部・外部ポジションと外界

ここでの大文字のSelfは一般的な用語としての自己selfとは区別されるものである。つまり，selfのように「下位部分」を何らかの最終的なかたちに統合する力ではなく(Hermans & Kempen, 2006, p130)，Selfは自己を全体として積極的に総合しようと指向するメタ的ポジションのことをあらわしている。しかし様々なIポジションはその総合に抵抗し，Self自体も他のIポジションとの対話の中で支配されてしまうような，言い換えればSelfはIポジションの内の一つであるという点において従来の一般的なselfと区別されなければならないものである。

「対話的自己」論の特徴として，ハーマンスらは著書の中(Hermans & Kempen, 2006, p6)で2点のことを強調している。1点目は「自己の世界に存在する様々な「私」，他者，モノを「ポジション(position)」として変換する点」，そして2点目が「変換されたポジションどうしの関係を，「声(voice)」によってつなぐ点(対話的関係)」である。このように，Iポジションごとに声(voice)を持っており，それらの声が決して同一のものではなく，また時と状況においては互いに矛盾する声を持つこともあるということが重要である。そこではあるIポジションから見た他のIポジションが「他者」となる。ここでは「内部―外部」での対話にとどまらず，「内部―内部」「外部―外部」また二つ以上の複数のポジション間での対話も起こりうるものであると想定されている。つまり自らの中で支配的であった声が，支配的でない他のポジションの声と対話することにより，支配的でないポジションの声の持つ意味を再評価し，再発見することにつながるものである。またこの「内部ポジション」と「外部ポジション」という二つのポジションを「往還」することの重要性についても述べられている。図1においてはこの「内部」「外部」という領域が仕切りによって明確に分けられているように表現されているが，ハーマンスらはこれらのポジション間が「非常に透過性の高いもの」であると述べる。この「内部／外部」間の関わりについては「内部化」「外部化」という概念によって説明がなされている。「子どもがお話の中のヒーローに同一化してそのものになりきる場合，「外部ポジション」から「内部ポジション」へと「移動」している(内部化)」「もしくは青年が彼ら自身の先入観を表現・具現化させるという形で，物語や芸術作品に新たな特徴を創り出す(外部化)」(Hermans & Hermans-Jansen, 2003, p545)。つまり，「内部／外部」間の往還によって新たなものが生み出されると考えられている点において，内部ポジションと外部ポジションとの間の対話が重要視されている。

ここまで見てきたように，自己の世界が分権化され，様々な自己を認めつつ，そこにポジショニングして「他者」である他のポジションの「自己」と対話することによって，様々な発見や葛藤が生まれ，自己形成がなされると考える点，また自己内対話を「複数のIポジションどうしの声の交換」であるとして理論化しており，「内部」と「外部」ポジションの「往還」を重視しているという点において，ハーマンスらの論はこれまでの自己論を超え，現代における「自己」を考えるにあたって意義のあるものであると考える。この「対話的自己」概念を援用して，文学的文章を読む際の自己内対話のモデルを以下に検討する。

4. 文学的文章を読む際の自己内対話モデルの構想

読者は文学的文章を読む際に様々なIポジションに立つ。例えば家で一人で読んでいる際のポジション，学校の授業のなかで読んでいるポジションなどである。これらのポジションはハーマンスらの「対話的自己」論における「内部ポジション」にあたる。このように読者は様々な「内部ポジション」に立つことができる。では実際に文学的文章を読んでいる際に読者はどのようなIポジションをとることとなるのであろうか。第2章において検討した府川・山元の言及を基に考察する。

例えば，文学的文章を読む際に読者が登場人物に同化／寄り添う場合，登場人物というIポジションに身を置くこととなる。登場人物というIポジションは「外部ポジション」に位置づくと言える。そのポジションはそれぞれ「声(voice)」を持つ。一方，「(登場人物)がかわいそう」や「(登場人物)は最低な奴だ」などといった感想は，様々な「内部ポジション」のうちのどれかから「外部ポジション」である登場人物を眺めた際の「声(voice)」であると説明することができる。このことは「登場人物を異化する／距離をとる」といわれるものである。さらには他の登場人物のIポジションに立つこともその読者には可能である。このことは新たな視点を得ることであり，そこから他のポジションとの対話が生まれることでもある。また語り手も，山元(2007b)の言及にもあるように外部ポジションとして捉えられる。しかし留意しなければならないことは，読者が「語り手」というIポジションに立つためには，作品内でその名称や言動が明示的に描かれる「登場人物」とは異なり，「語り手」の存在について意識的にならねばならないという点である。

ここまで述べた「語り手」というIポジションや「登

場人物」というIポジションなどの様々なポジションに読者が立つことにより，ポジション間での対話が行われ，読者が「語り手は登場人物をどのように評価しているのか」といったことに目を向けることで，語り手のものの見方や価値観といった新たなものを発見する契機となりうるのである。更にそのような「語り手」をなぜ作者が設定したのかということを考えることは，「作者」というIポジションとの対話でもある。

そして文学的文章の学習の場面を想定した場合には，他の学習者の意見も「外部ポジション」に位置づく。「外部ポジション」としての他の学習者／読者の意見(声(voice))と，他のポジションとの間で対話が生じると説明することができる。

では，読者が自己内対話を通して「私」という存在を追求する際にはどのような過程を経た自己内対話がなされているのだろうか。それには先にも述べた「内部ポジション」と「外部ポジション」との「往還」の重要性が問題となってくる。「内部ポジション」同士の対話，もしくは「外部ポジション」同士の対話だけではなく，「外部ポジション」と「内部ポジション」との間での対話がなされ，その対話が往還することによって自己内のそれまで意識していなかったものが立ち上がるといえる。たとえ外部ポジション間のみでいくら対話が活発に行われたとしても，それは他者の目ばかりを気にした，信念のないものとなってしまうだろう。また，内部ポジション間のみにおいて対話が活発になされていたとしても，それは自らの考えのみを押し通す独善的な「私」のあり方であると言えるだろう。つまりは，ハーマンスらが述べるように「内部ポジション」と「外部ポジション」との間で対話が行われ，外部ポジションから自らの内部ポジションを見つめ直すことが，読者が「私」という存在を追求する過程であると説明できる。しかし，「内部ポジション」同士の対話，もしくは「外部ポジション」同士の対話が無意味だということではなく，それらが「外部ポジション」と「内部ポジション」との間での対話の往還の契機となるものであると言える。先にも述べたように，「対話的自己」概念を援用して読者の自己内対話の過程を明らかにすることは，「自立した読者」育成における学習指導のあり方を検討する上で手がかりとなるものである。

5. 読者／学習者の自己内対話を促進させる文学的文章の学習指導に関する検討

本稿4においては，ハーマンスらの「対話的自己」論を援用して「文学的文章を読む際の読者の自己内対話モデル」を検討した。ここでは，このモデルを用いて『羅生門』を対象としながら，実際の教材の学習指導の可能性について考察する。『羅生門』は高等学校において「定番教材」として広く知られている一方，その教材性については疑問視する声が少なくないことも指摘されている(丹藤，2010，pp123-124)。教材性への疑問視はこの作品を高校生が読むことの価値，すなわち教材価値が十分に明らかにされていないために生じている。本稿4に提示した自己内対話モデルは，従来明確であったとは言いがたい文学的文章の教材価値を明確にするための手がかりになると考える。

5-1.『羅生門』を読むことであらわれるIポジションとその対話の過程

「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が，羅生門の下で雨やみを待っていた。」という語りから始まるこの作品を，読者はこの「下人」という登場人物に寄り添って読み進めることとなる。語り手はこの下人の生きる時代がいかに厳しい環境であり，またこの「下人」自体も主人から「四五日前に暇を出された。」というこれから生きていくにあたって「途方にくれてい」る状況であることを語る。このようにして読者は「下人」に寄り添ってストーリーを読み進めることとなるだろう。そのように読み進め，物語内容(ストーリー)を簡潔に述べるとすれば，「羅生門にて下人が老婆と出会い，その老婆の着物を奪い取ってその場から逃げ去る」ということになる。これは下人の心情の変化(盗みを犯すに至っての下人の心の葛藤)に目を向けながら読み進めた結果である。その一方で読者は，「下人」がここまで葛藤をする契機となったもう一人の登場人物「老婆」にも目を向けることができる。「下人」の「老婆」に対する問いかけや脅すような行動やそれを受けて「老婆」が述べることばや振る舞いのすべてを「下人」の心情の変化へと影響を与えていると考えるができるだろう。この時，読者は今まで寄りそってきた「下人」という登場人物に対して距離を置いて眺めることができるようになる。読者はそのように様々な登場人物になることやそこから距離を置いて作品を読み進めていくこととなる。このような読者は，先に述べたモデルにおける外部ポジション(Iポジション)を獲得しているということができる。登場人物である「下人」や「老婆」といったIポジションに身を置くことによって読者は作品を読み進め，「下人」というIポジションと「老婆」というIポジションが対話することで，どちらかのみに目を向けていたのでは意識できていなかった事柄(例えば「下人」の心情変化の理由や老婆の側から見た「盗み」など)を理解することにつながっていくのである。

しかし，この『羅生門』は上に述べたような「物語内容 (ストーリー)」を理解して読み終えられる作品ではない。そこには「語り手」という重要な問題が存在する。「作者はさっき，「下人が雨やみを待っていた」と書いた。」や，「当時の京都の町は」，また「この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。」といったように，「語り手」が読者にその存在を強調する場面が多くみられる。読者は読み進めるうちに，この「語り手」という存在に意識的になり，多くの疑問を持つ。事実, 鎌田 (1999) において高校生が『羅生門』を読んだ際の初発の感想を整理したものの中には「作者はさっき…(略：稿者)」や「Sentimentalisme」，また下人が老婆の衣服を剥ぎ取ってその場を去る際に語りの視点が変化していることを指摘しているものが存在することが報告されている (鎌田，1999，p12)。このように，読者は「語り手」という存在を意識しながら読み進めることとなる。それはこの『羅生門』という作品に読者が「語り手」という存在に意識的になるような仕掛けがほどこされているからである。

このように「語り手」という存在に読者が意識的になった時に，読者は「語り手」が登場人物をどのように語っているのか, またなぜ「語り手」はこの話を語ったのかということに目を向けることが可能となる。山元 (2005b) は，小説の学習指導に関してバフチンの論を基としながら「(小説は：稿者補) 作者と語り手との，語り手と登場人物との，作者と登場人物との対話である」とし，作者がどのように語り手に語らせているのかということを考える価値について言及している。山元によれば作者と語り手と登場人物との「距離」に目を向けることが小説の「多層性」を見つめることとなる。

この「語り手」と登場人物の関係という問題において最も重要なのは，『羅生門』最後の一文である「下人の行方は，だれも知らない。」であろう。そこには自らの論理によって老婆から着物を奪い取った下人が，その自らの行動を振り返ることなくその場を離れてしまうことに対する語り手の批判がみられる。「語り手」と「登場人物」との関係性がここでは問題となるのである。「語り手」というＩポジションを獲得することにより，「登場人物」というＩポジションとの間で対話が生まれることとなる。物語内容 (ストーリー) を追っていた時には「語り手」というポジションに意図的に立つことができていなかったといえる。それが作品の仕掛けによって意図的になることにより, 語り手の語りに目を向けることとなる (例えば「老婆は，大体こんな意味のことを言った」をはじめとする, 語り手が用いている表現など)。それは「登場人物」というＩポジションに立っていただけでは気づくことのできないことがらである。田中 (1996) は『羅生門』の最後の一文について以下のように述べている。

下人が行為を獲得し，「夜の底」に駆け下りていくときのある種の「解放」感，それこそ〈語り手〉の批評の対象であり (小説は決して主人公の主観が作品の空間の全てではない)，〈語り手〉は下人が己の既成の〈観念〉によって〈世界〉の方を組み替えてしまう，その若々しい倨傲と錯誤，観念の陥穽にあることを語っていたのだ。認識の無根拠性, 観念の陥穽こそ『羅生門』という小説の装置によって産出されたのである。(田中，1996，pp37-38)

ここで田中は「語り手」が「下人」に対して下人の「観念の陥穽」をえぐり出してみせたのだとする。このことについては丸山 (2012) も「下人」と「老婆」を対比させながら以下のように述べる。

老婆の理屈は，人からどう思われるかを気にするためにある理屈であり，老婆には自意識がある。他者との共存をはかろうとする老婆とは随分違う人物になったと言える。あえて対比的に整理すれば，下人の方は，他者を顧慮しない悪であり，他者認識に欠けた皮相上滑りの「自己解放」の生き方であり，老婆の方は，他者を意識する悪であり，他者との共存をはかる生き方であると言えよう。(丸山，2012，p223)

このように語り手と登場人物との関係に着目した場合には，それまでとは異なった人物像が見えてくる。ここでは「下人」の認識に潜む問題点や，それと対比した場合の老婆の生き方など，「語り手」という立ち位置を獲得することによって，新たな読みやものの見方が発見されているのである。さらに, このように「下人」を語る「語り手」自身も同じ問題を抱えていることに気づくこととなる。それは「下人」に見られた「認識の限界」であり，「語り手」自身も「誰も知らない」と語るのはこのためである (丸山，2012，pp225-226)。このように語る「語り手」というＩポジションと「内部ポジション」としてのＩポジションとが対話をすることは，「下人」や「老婆」「語り手」の抱えている問題を浮かび上がらせる行為であり，現実世界にも通ずる問題であることを読者自身が意識することによって，読者は自らの問題や価値観を相対化して見つめ直す機会を得るのである。「他者を顧慮しない」下人と，「他者を意識する」老婆という「外部ポジション」は，この複雑化した現代社会を生きる読者の複数の「内部

ポジション」と類似するものである。他者との関わりが希薄であると指摘される一方，学校では学習者が，他者からの承認を得ようと「キャラ化」しているという，ねじれた / 矛盾した状況の中に身を置く生徒たちにとって，『羅生門』の下人と老婆はそれぞれ自らを映す鏡である。その姿は決して心地よいものではない。だからこそ登場人物に対する批評は行うことはできたとしても，自らをそこに重ね合わせ，自分を批評することは学習者にとって困難であり，できれば避けて通りたいことでもある。他者を自らの価値観によってのみ判断し，それにそぐわないものとは関わることをやめること。また他人の眼ばかりを気にして，他者から求められる役割をこなすことによってしか認めてもらう術を持たないこと。これらは相反するものでありながら，どの読者の心の内にも潜む問題である。そして何より，この『羅生門』の語り手は「下人の行方は誰も知らない。」と語り，この問題を私たち読者に委ねてくる。これこそが真の問題なのである。各人の心の中に潜む相反する「下人」と「老婆」を，どうにか折り合いをつけながら私たちは生きており，これからも生きていかねばならない。その生きていくうえで避けて通ることのできない問題を語り手は語っていながらも，その問題に答えを出すことなく語ることを中断しまうのである。ある意味ではそれが語り手の出した答えなのかもしれないが，では翻って私たちはどうだろうか。「語りを中断した」と語り手を評価する「私」も，日常生活の中で答えを出すことを中断する / もしくはその場に合わせた信念のない答えを出しているのではなかろうか。このように考えた際に，やはり『羅生門』を語り手も含めた「下人・老婆・語り手」という三つのポジションから考えていく必要があるのであり，語り手の語りを問題にすることが現代社会を生きる読者の「私」を考えるにあたって価値があるのである。「私」は生きていく中で苦悩し葛藤する。往々にして答えを出すことを恐れ，「とりあえず当たり障りのない」答えを選択しがちである。このようにして『羅生門』を読みながら自己内対話するということは，読者自身の中に抱える複数の自己を対話させ統合させるにあたっての苦悩や葛藤の過程を自覚することであり，またそれら複数の自己を統合する「メタ的なＩポジション」をも「語り手」という視点から捉え直し，様々な「内部ポジション」「外部ポジション」間の対話の往還を果たすということなのである。このようなメタ的ポジションを獲得することは「下人」と「老婆」以外のポジションに立つことにもつながる。つまり，老婆に髪を奪われた死体や騙されて蛇肉を売りつけられた人々，またその時代に生きた人々など様々な立ち位置から「下人」や「老婆」のポジションと対話することも可能である。そこでは「下人」「老婆」「語り手」だけに目を向けていたのでは見いだすことのできない解釈や，自らの価値観と向き合うこととなる。そのような葛藤を読者の内に生み出すところに『羅生門』の価値があるといえる。

5-2. 学習者の自己内対話を促進させる『羅生門』の学習指導に関する検討

ここまで，『羅生門』にあらわれる様々なＩポジションとその対話の過程を『羅生門』に対する読みの過程の分析を基にしながら考察した。そこでは様々なＩポジションに立つことと複数のポジション間において対話が行われることを確認した。以下では，本稿５で探究したような読者の「自己内対話」を活性化させるための手立てを検討することとする。

丹藤 (1995) は定時制高校での『羅生門』の実践を報告している。丹藤は『羅生門』の学習のまとめとして4つの学習課題を設定している。ここではそのうち「課題2　老婆の立場に立った時下人はどのような人物として写るだろうか」「課題3　もし自分が下人と同じ状態で羅生門で老婆と出会ったらどうすると思うか，小説風に書いてみよう。」の2つを取り上げて考察する。それぞれの課題の趣旨を丹藤は「老婆の視点から下人を捉えさせようとした (課題2)」「自分を下人に見立てて虚構のなかで老婆との出会いを再現させることで，出会いの意味を探らせようとした。虚構において下人としての自己を相対化することをねらったものである (課題3)」と述べている。課題2に関して言えば，「老婆」というＩポジションに学習者を立たせ，そのポジションから「声」を表出させる営みであると言いかえることができる。課題3に関しては，新たな「語り手」というポジションに学習者を立たせることによって，そこから様々なポジションとの対話をおこなうものであると言える。このように本稿4に述べた「読者の自己内対話モデル」における対話が生み出されるような活動が設定されているといえる。しかし丹藤はこの実践に関して次の問題点を指摘している。

> この度『羅生門』の授業で狙ったことは，行く所がなく自らの観念の世界に自閉して，現実と出会おうとしないという点で生徒たちと近質と思われる下人を批評することで，自らを批評の対象としてもらいたいということであった。(中略：稿者) 下人に対する批評はあっても，ひるがえって自己についての批評の言説は引き出せなかった。(丹藤，1995，p169)

このように自己についての批評へとすすまなかった原因は，丹藤も述べているように「下人」という登場人物の抱える問題や認識と読者自身との関係性について，学習者が我がこととして関連させられなかった点にあると言える。それはハーマンスらの述べる「内部化」がなされていない，もしくはそれを読者が拒否している状態であると言えるであろう。つまり「外部ポジション」としての「登場人物」を自らのうちに取り込むこと,「登場人物」に自らを重ねるということなく,「外部ポジション」間のみで対話が行われてしまっている状態にあると言える。丹藤 (2001) はこの実践を踏まえて，新たに『羅生門』の実践を行っている。ここでは物語内容の読みを成立させた上で,「語り手」に着目をさせることでそれまでの自らの読みを相対化させることを目的として授業がなされている。ここでも丹藤は初発の感想と次時での感想の変容があまり見られないことを挙げて「失敗したのかもしれない」と述べている。しかしながら着目すべきは，語り手に着目することで「「下人」に対して「同情的」な態度をとる生徒が多数いた」ということである。これは明らかに「外部ポジション」としての「下人」を「内部ポジション」との対話のなかでそのように捉えたということである。そのように考えた際に,「なぜ自分は「下人」に同情的な態度をとるのだろう」という,「同情する」ような自らの「内部ポジション」を相対化する対話が生まれるはずである。その原因は自らが「下人」と同じような問題を抱えていることや，もしくは似たような価値観を持っているためかもしれない。または「語り手」の語りによってそのように読まされてしまっているためかもしれない。このように「なぜ自分がそのように読んだのか」ということは,「内部ポジション」を問題とする問いであり，そのことは，自らの「内部ポジション」に立つのみに終わらない。そのことは外部ポジションである「語り手」や「登場人物」といったポジションとの対話を促進させるものであり，またその対話を基にもう一度「内部ポジション」に立つという「往還」が行われる。このように「自己内対話」を行い続けることのできる存在こそが「自立した読者」であり，そのために「登場人物」や「語り手」といった「他者」の思考構造を体験することがもたらすものは大きい。

『羅生門』の読みにおいては，読者は様々なポジションに立つこととなる。それらのポジション間の対話が自己内対話であり，読者が「私」という存在を追求するためには，本稿において明らかにした自己内対話の過程を踏まえた指導を行う必要がある。

自己内対話の過程を明らかにすることは,「他者」との関わりを明らかにしようとすることでもある。本稿においては「他者」を自らの外部ポジションに取り込み，それらがそのように対話するのかを検討した。しかし，そのような外部ポジションに取り込むことのできるものばかりが「他者」ではない。今までの自分には考えられなかったことや分かり合うことが困難な「他者」との対話の可能性を探る必要がある。そこで手掛かりとなるのが佐伯胖の提唱した「ドーナッツ理論」である。佐伯は自分を取り巻く世界を「I/YOU/THEY」という三つの世界で説明する。先に挙げた，わかり合えない「他者」は佐伯の述べる THEY 世界に相当する。そしてそれだけであれば私たち自身である I 世界と THEY 世界とは交わることが決してない。そこで重要となるのがこの二つを媒介する YOU 世界である。この YOU 世界は自分自身にとって取り込むことのできる「他者」であり，本稿で述べた「外部ポジション」にあたるものである。佐伯の理論にのっとって説明するならば，本稿が問題としたことは I 世界と YOU 世界の関わりについてであった。しかし，自らが受け入れられるもののみと対話を続けることは，自己を肥大化させ続けるのみに終わる危険性をもはらむ。そこで YOU 世界と THEY 世界との関わらせ方に目を向ける必要性が生まれてくるのである。この時に, 今回検討した「I 世界＝内部ポジション」と「YOU 世界＝外部ポジション」の対話の過程が「THEY 世界」との関わり方を探るうえでも大きな役割を果たすこととなるといえる。

6. 結語

本稿においては文学的文章の読みの自己内対話モデルについて検討し, 自己内の「内部ポジション」と「外部ポジション」との「往還」がなされることの重要性を述べた。ハーマンスらの「対話的自己」論を援用したモデルを用いて分析を行うことは，文学的文章や自己・他者の言葉による〈対話喚起性〉を多層的に捉えることであり，そのことが「自立した読者」育成のために教室において文学的文章を読むことの価値を見いだすことにつながる。特に小説においては物語内容のみならず, 語りの構造そのものに読者の「〈内的〉対話」や読者相互の「〈外的〉対話」を生み出す〈対話喚起性〉が多層的に仕掛けられているからこそ，学習において読者の自己内対話を促し，作品についてのあるいは自身についてのあらたな発見が促されるのである。

【主要参考引用文献】

井上俊・船津衛〔編〕(2005)『自己と他者の心理学』有斐閣アルマ

鎌田均 (1999)「「新たなる倫理性」を求めて 『羅生門』の授業をめぐって田中理論に学ぶ」『日本文学』48(8), pp11-21

佐伯胖 (1995)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店

田中実 (1996)『小説の力 新しい作品論のために』大修館書店

丹藤博文 (1995)『教室の中の読者たち』学芸図書

丹藤博文 (2001)『他者の言葉―文学教育における批評行為の成立―』学芸図書

丹藤博文 (2010)「第六章 『羅生門』(芥川龍之介)の授業実践史」『文学の授業づくりハンドブック』pp118-137溪水社

土井隆義 (2009)『キャラ化する / される子どもたち―排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット

永田麻詠 (2009)「国語教育における自己観の考察―新たな自己観の構築に向けて―」『国語教育思想研究』1号 pp11-20

難波博孝 (2008)『母語教育という思想 国語科解体 / 再構築に向けて』世界思想社

濵田秀行 (2013)「物語を共同的に読む授業における生徒の自己内対話―読みの交流に書くことを取り入れた高等学校国語授業の分析―」『読書科学』第55巻第1・2号合併号

府川源一郎 (1995)『文学すること教育すること』東洋館出版社

船津衛 (2011)『自己とは何か―「自我の社会学」入門』恒星社厚生閣

丸山義昭 (2012)「芥川龍之介『羅生門』の語りをどう読むか」『文学が教育にできること』教育出版

溝上慎一 (2008)『自己形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社

山元隆春 (1994)「読みの「方略」に関する基礎論の研究」『広島大学学校教育学部紀要 第Ⅰ部』第16巻 pp29-40

山元隆春 (2005a)『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』溪水社

山元隆春 (2005b)「二 小説の学習指導」『朝倉国語教育講座 Ⅱ読むことの教育』朝倉書店

山元隆春 (2007a)「5節 教材研究」難波博孝『臨床国語教育を学ぶ人のために』世界思想社 p288-300

山元隆春 (2007b)「「対話的自己」を育む条件―ポール・フライシュマン『種をまく人』を手がかりとして―」『月刊国語教育』2007年1月号 pp16-19

H. Hermans, H. J. M. & Hermans-Jansen, E. (2003). Dialogical processes and development of the self. In J. Valsiner & K. Connolly (Eds.) Handbook of developmental psychology. London: Sage: pp534-559

H. Hermans & H. Kempen 著 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳 (2006)『The Dialogical Self 対話的自己 デカルト / ジェームズ / ミードを超えて』新曜社